

国内研修活動報告書

① 目的

私が隠岐の島の島前に行った目的は、最初は「知るため」であり、その後「活かすため」、そして「つなげるため」でもあった。

一点目の「知るため」とは、私は東京という都会に生まれ育ったため今まで島での暮らしを過ごしたことがなく、生活、人間関係、環境について想像することができなかった。また、島前と聞いて思い浮かんだのはあの地域おこしの成功例として有名な海士町、島前高校である。私は今回の機会を通して、島の人たち、全国からくる島前高校の生徒、環境はどういったものなのか、そしてなぜ海士町は成功したのかを肌で実感するのを目的に当初は励んでいた。

二点目の「活かすため」とは、ゼミで関わっている存続危機にある白馬高校の魅力化に対して、自身の今後の地方に対する考え方に活かすためである。

さきほども少し述べた通り、海士町にある島前高校はかつて廃校寸前から魅力化として全国募集や学習センター、ヒトツナギ部の活躍により立て直し、今では全国から高校生が集まっているという有名な高校であり、私は授業やテレビを通して何回も目にしていた。

島前合宿に行くことを決めた一か月後あたりに、湯浅ゼミで長野県の白馬村にある、スキー選手を多く輩出していることで有名な白馬高校の魅力化プロジェクトに大学生として関わるようになった。

白馬高校は現在生徒数が足りておらず、このままでは廃校となってしまう危機的状況にある高校である。

廃校危機の要因は偏差値の低さ、進学率の悪さであり、また昔からスキー部以外あまりいい印象を抱かれていないため外部の高校への流出が増えているという。

そして現在、その危機を脱出するために島前高校と同じように公営塾を設置するとともに、新しい学科を設け全国募集をすることで生徒数を増やそうとしているのである。

魅力化が行われる前の島前高校と現在の白馬高校の状況は良く似ていると私は感じた。なので、島前高校生と交流することで生徒にどのような差があるのか、公営塾に集まる人々はどのような人なのか、今後「活かす」ためにも今回の島前合宿はなった。

そして最後の「つなげるため」。

私は当初から、湯浅誠先生に誘われ運営として今回の国内研修に望んだ。

それは、毎年中心となっていた近藤弘志さんが休学で運営を思うようにできないからとのことであった。なので、私は少人数の運営チームと一緒に、この合宿をこれからもつなぐために一年生の基礎ゼミを対象に宣伝活動を行い、合宿中の内容を毎週月曜と水曜に考えた。

この報告書は以上の三点から振り返りたいと思う。

② 振り返り

(1) 知るため

まず、私は「都会」と「島」の暮らしの違いについては今回を通してよく知れたのではないだろうか。

まず環境についてなのだが、私は合宿中の約一週間のほとんどを過ごした西ノ島は、信号機が一か所を除いてなかった。またコンビニもなく、夜は人が出歩いている様子がほとんどない。警察は車だけでなく船もあり、サザエに関しては中学生に聞いたところお小遣い稼ぎに取りに行くもので、銚子で魚も取るという。あげればきりが無いのだが、私が都会で過ごしていて感じていた普通は、この島では通用しなかった。

もう一点感じたのは、地方がもつコミュニティである。

これは今までも、インターンに行った青森県南部町やゼミで関わっている白馬村でも感じたのだが、挨拶をすればだいたい返ってくる。普通のことには聞こえるが、都会ではまず挨拶をせず、マンションで挨拶しても返ってこないことも多い。また、私は都会で暮らしていて近所づきあいという文化がなく、マンションで隣に住んでいる人の顔もよくわからない。

それに比べ、今回は道ですれ違う人々に挨拶をすれば笑顔で返してくれる方が多く、参加したメンバーからも感動の声が多かった。また、近藤さん家でBBQをしたときには近所のいろいろな方が集まり、子供と遊ぶことができたりなど深い交流をすることができた。このことも、都会ではあまり考えられることではないであろう。

以上、環境とコミュニティについてはよく知ることができたのだが、海士町の成功の理由などは台風の影響で一回しか行けなかったため、あまり感じるができなかったのも事実である。ただ、初日に参加させていただいたキンニャモニャ祭りは活気にあふれ、メディアからの注目も多く、また花火大会もかなり盛大なものだったことから、私が今までに訪れた過疎地域とは違うエネルギーを感じた。

(2) 活かすため

活かすために島前高校生と学習センターの方々いろいろな話を聞き出そうと私はいきこんでいたが、思っていたほどの成果を上げられず力不足を実感し、反省点が多いものとなった。

高校生との交流は、聞きたい事や知りたい事はいろいろと知ることができたが、話の盛り上がりには欠けていたため私生活や学校の様子など、何気ない話を聞くことができなかった。その原因としては、私が初対面の人間に対して意見を聞き出すのが苦手なこと、最初の会話で相手のリアクションがまずまずだったことからモチベーションが保てなかったこと、ヒトツナギの今の活動に対しての知識がなかったことが挙げられる。

しかし、白馬高校生との交流と比較をして感じたことがある。それは色々あるがまとめて言ってしまうと「食欲さ」である。

ヒトツナギ部の人々は常に求め、追求する姿勢なのが交流や、後日向こうから送られてきた我々との交流の反省からも読み取れた。

私が話した女の子も、聞いている限り相当地域の人と関わっているのだが、「もっと一緒に活動したい」と強く言っていた。また、私から見たら素晴らしいことを高校生のうちからしているのだが、まだ自分たちの活動に大人も子供も納得していないようであった。

そのほかにも積極的に発言する姿勢、先輩の後輩に対する要求などを見ても、それは白馬高校生にはない姿勢のように見えた。

学習センターは話していてかなり圧倒された印象であった。さすが東大なだけあり、物事に対して論理的に考えており、同学年だということにとっても驚愕した。

話し合いでは法政の完敗という印象であったが、個人的には考えることの多い良い機会となった。

(3) つなげるため

これは成功と言えるのではないだろうか。

私は基礎ゼミに宣伝をしに行く、内容についてアイデアを言うくらいとたいしたことはできていなかったのだが、そのなかでもどのようにしたら人が行きたいと思うプレゼンなのか研究、工夫をし、再履修した体育でも声をかけ、結果 20 人近くの一年生が集まってくれ選抜しなければならぬ事態にまでなった。また、参加してくれた人の満足度も高く、この合宿に運営として関われば本当に良かったと思えた。

③ まとめ

振り返ると私にとってこの研修は様々なものに気づかせてくれる良い機会であった。

一点目は、自分はまだまだ人から意見を聞き出すことに対しての不得意さ、ファシリテーション能力の低さなど、白馬高校の件やこれからの将来に必要とされることがまだまだ甘いということに気づいた。

また、学習センターのインターン生と関わり敗北感を味わったのと同時に、負けてられないとこれからはに向けてモチベーションをあげる機会となった。あの人たちほど物事を論理的にとらえることができない私が地域に対してどうしていくのか、どのような学生生活を送るべきか、答えはまだ出ないが考える良い機会となった。

そしてなにより、隠岐の島の島前の環境、人、食べ物が好きになった。来年もぜひ、研修で訪れいろいろなものを学びたい。